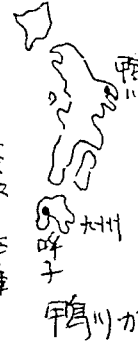


報 痴 籠 屋 新 聞

荷車はナオと共に



「鴨子登一生活マヌ(電)」
 昨二月の十三日に父宛宛の
 鴨川と出発した。荷車は
 一月二十日現在、佐賀県唐津
 子断に到達した。断民考
 けての(鴨川)の小積の中と
 涼しい車輪の響き(電)
 が全所を包む。ぼんやりとは
 下った。古森と夫婦の熱
 いアツい歌詩にヒトリヨロヒと
 泣くふとした。

横須賀(本取) 下田(本車)
 子浦(車) 土肥(車) 田子浦(車)
 大井川(車) 本川根(車) 徳
 大井川(車) 金谷(車) 静岡(車)
 岡崎(車) 名古屋(車) 歩
 近鉄(車) 貴船(車) 本全(車) 京
 都(車) 同日(車) 亀岡(車) 和知(車)
 歩(車) 海(車) 鳥取(車) 東(車) 聖
 取(車) 山(車) 山口(車) 同(車) 東(車) 博
 福岡(車) 車(車) 鴨子
 極寒の中を移動する
 はめになった。大王のタマヒ
 に向う途中ではウガイス
 が鳴っていた(十二月三十日)

そして、亀岡から北に歩いた
 時は春先のあたたかさが
 あった。が、和知の煮川宅で
 はストーブにかじりついてた。
 雪が降っていたのだ。▲▲▲
 又里浜から歩いてお夜は横
 須賀のゲル宅であった。下田の
 ベンちゃんは今、家造りの真最
 中。基礎コンクリート打ちを全伝
 わせてもらった。子浦の峠の茶店
 のおじいさんには下下張り土地を
 提供してもらった。土肥の山田家
 の家ではササをたくさん用意し
 て待っていてくれた。イロリを焼いて
 食した。静岡の北条氏は病い
 と共にはまきまきしているが、元気が
 あった。大井川上流にあるヨ
 ーチェン、ユミさんとここには、まじ
 い思い出を作りました。

CDに納める音撮りのバック
 で手拍子と叩いていたのだ。
 ウンチャカバンド(栗山町)と
 サニオブライスト(大阪)の伴奏
 で砂ヤンが歌う曲である。
 一つ新譜が完成されるのが
 たのしみだ。
 岡崎では島村博宅でアツ
 のまなほを受け、帰りはアツ
 アツの鍋焼まうどんまでごち
 そうになった。名古屋では
 夜八時すぎの、天然の誘りに
 応じて、岡本信セシ人が山本の
 街まで出てきてくれた。ビル
 と靴走になった。志摩半島
 突端の大王断ではタマヒで
 大みかた着ま、その夜はタマ
 のギター、ナオの尺八のセツ
 シヨニ、キモチヤカッター、

おじいさん、おにいさん、おのい
 ほかにもいろいろおいしいもの食
 べさせてもらった。和知でササの向せ
 さん、カウスでイロイロなもの作
 つての人。カヌーと一緒にニエ、ウツン
 と打ち、ヤパ、ヤローを留めて、おん
 ぬきで、尺八のホームコンサート開催
 エキパン。竹ガレ作りも皆でした。
 東出原町の三康、百十百夫婦。
 この人たち、実は私(ナオ)の空同
 時代の隣人。隣りと言えども田とは
 さんで、五百メートルはなれてた。
 岡山では、政、民、島、最後の島民
 であつた肥後貞則、秋子宅と計
 ぬる。あいつは二人の三十代の
 息子と夫、いかなしみと共に
 した。山口では柳井の駅まで、TR
 を利用した。そこに猿(オキ)を
 猿(オキ)の修(オキ)さんがおに

痴報
 籠屋新聞社
 千葉県鴨川市
 代(だい)623
 0470-92
 -9912
 タビ先編集
 室ハ佐賀県
 鴨子断ノ
 古森康隆方
 ココハ福岡
 市天神から
 西へデニシヤ
 1時間半行
 いたコロにある
 漁業の街で
 す。

京都では、いもながら、田ア
 眼科のナンバ先生宅で。
 四条河原町と二橋に散歩し、

采られた。小曾をうづく日であった。殿の女中十キロの山中にある猿無野座(一)猿の学舎)で荷を解く。

大道(二)としての猿曳きと無量の世とも言える。荷車、曳きとの世紀の大対談が、焼酎片手に運来くりひろげられた。何とナオはお猿(三)と共には(四)月内も世話(五)に合ったのである。

その対談の内容は別項にゆずる。とにかく、ナオはタタにベニキョーする気になったのだ。中世(六)世民の世であつたものが、正成(七)世民に受けつがれるのかと思ふ。ワクワクする。出巻(八)前(九)に私にスガワラ(十)スガ。

「小栗判官」と読んだら、とすすめられた。いま、そのすすめが、アキタク(十一)思(十二)える。山口(十三)のあと、博多(十四)へ直行。マオ(十五)へ(十六)宛(十七)主(十八)留(十九)吉(二十)の追(二十一)と(二十二)う(二十三)会(二十四)に出る。相(二十五)手(二十六)は(二十七)す(二十八)て(二十九)この(三十)世(三十一)に(三十二)ない(三十三)が、(三十四)ニ(三十五)カ(三十六)ス(三十七)反(三十八)人(三十九)になれ(四十)そう(四十一)なので

マオの反人たちの思(一)に出(二)る(三)し(四)と(五)間(六)ま(七)に(八)采(九)ら(十)れた(十一)。

博多(十二)では(十三)市(十四)田(十五)書(十六)館(十七)に(十八)通(十九)り(二十)日本(二十一)中(二十二)世(二十三)史(二十四)の本(二十五)と(二十六)交(二十七)す(二十八)る(二十九)。

特集

平成世民と芸能

選ばれた者たちの

上下ゆき

九州、福岡市で

福岡(一)ドーム(二)近く(三)と(四)走(五)る(六)ヨ(七)カ(八)ト(九)ピ(十)ア(十一)道(十二)路(十三)の(十四)横(十五)断(十六)歩(十七)道(十八)で(十九)ナ(二十)オ(二十一)は(二十二)信(二十三)号(二十四)が(二十五)赤(二十六)から(二十七)緑(二十八)に(二十九)切り(三十)替(三十一)る(三十二)の(三十三)と(三十四)を(三十五)待(三十六)て(三十七)いた(三十八)。

は、(一)背(二)後(三)に(四)度(五)く(六)荷(七)車(八)と(九)対(十)に(十一)な(十二)った(十三)ナ(十四)オ(十五)の(十六)全(十七)体(十八)像(十九)が(二十)あ(二十一)る(二十二)が、(二十三)そ(二十四)れ(二十五)を(二十六)理(二十七)解(二十八)し(二十九)て(三十)る(三十一)。

この(一)先(二)え、(三)じ(四)う(五)い(六)う(七)コ(八)ース(九)と(十)ど(十一)る(十二)の(十三)か(十四)未(十五)定(十六)は、(十七)ま(十八)り(十九)して(二十)る(二十一)。

スタート(一)は(二)仰(三)て(四)落(五)下(六)した(七)。

私が(一)目(二)線(三)と(四)落(五)下(六)す(七)に(八)いた(九)場合(十)は(十一)ど(十二)う(十三)な(十四)ま(十五)か、(十六)顔(十七)を(十八)正(十九)面(二十)に(二十一)向(二十二)けて(二十三)着(二十四)く、(二十五)そ(二十六)の(二十七)は(二十八)ず(二十九)み(三十)で(三十一)相(三十二)手(三十三)と(三十四)目(三十五)線(三十六)が(三十七)ど(三十八)く(三十九)り(四十)と(四十一)しま(四十二)う(四十三)。

と(一)対(二)に(三)な(四)った(五)ナ(六)オ(七)の(八)全(九)体(十)像(十一)が(十二)あ(十三)る(十四)が、(十五)そ(十六)れ(十七)を(十八)理(十九)解(二十)し(二十一)て(二十二)る(二十三)。

の(一)距(二)離(三)に(四)近(五)づく(六)まで(七)ナ(八)オ(九)の(十)姿(十一)か(十二)ら(十三)目(十四)を(十五)離(十六)さ(十七)ば(十八)った(十九)。

でありたくないと思い、攻
撃的でありたくないと思っ
ても、融け合う目線がじ
うものなのか、わからな
い。おもたない、おもえな
目では
対等ではないように思う。
ナオはビニに目線と置け
ばいいのか、決めかねて
いる。

△ △ △

よかとび路道を通へ
折れて、西新(にしん)の街
に出た。博多の城の西側
にできた新しい街である。
その街と東西につら抜く
国道がある。東は市内
を通り、北九州に向い、西は
佐賀県唐津に抜ける。
その国道の南側に二平行と
幅員十メートルほどの道が
ある。旧国道であった。
道の西側は小規模商店
が軒をつらねている。タカ
はこの道が歩行者天国

になるとみえて、車の流
れはない。道のど真中に
リヤカーを利用した屋台
が並ぶ。野菜やくだもの
を売っている。また、両側
の店も商品と道に張り
出して、道全体が店
舗の感がある。

人ごごに返えしている。
たこ焼き屋の呼び込みに
女子高生達の群衆がた
びいてたり、自転車と押す
買物客の中年女性があ
進みかねて、通り過ぎる
人の群衆を待つて立ち止ま
っている光景もあつた。
ナオも荷車曳きと遠慮
することタビタビであつた
車は長さ一・八メートル、幅が
七センチあるのだから、ビ
ンでも、人の群衆とどき分
けることになる。
二メートルほど、西行すると

屋台の列は切れた。ホッ
とした。これから先は、ス
に車と交けるだろう。
向うから背の高い男が歩
いてきた。その左脇には、
寄り添うようにして小柄
な女がついている。男は両
手と腹のあたりで組み、両
ひじを横に張り出して、
幅五ヒリながら歩いて
ナオは人から見られること
あつても、ナオの側から周囲
の人面と見回すことが
できない。それは先の「ビ
ニに目線と振っていかか
ら」の延長上で歩いてい
るからだ。だから、長身の
男が遠くから来た、と言
う程度にしか目に入らなかつた。
その男が十メートルほど先ま
で近づいてきたとき、初め
で気づいたのだが、横に突っ張
った両腕には傘が四、五本

上下ゆきはニタとモ言う。乞食よりも上位の賤民。道々の
者、飯の者、ササウ者、河原者に通じる。どれも中世以降の
賤民の所。
コトバの歴史
じまげ
上下ゆき
みちぎ
道々の者

道々の者とは、一般平民とは異
なる取能を持つてゐる人のこと。
兵の道(武士道) 木匠の道
芸能者、細工師も含まれる。
猿曳き、竹細工など。遊女(それ
の娘)も芸能者であり、道の者
であつた。好色の道も芸能者
なのだ。それは宮中において
も欠かせない習みでもあつた。
後白河法皇は今様(はりゆめ)
オタクであり、美濃、青墓(現代大
垣市)の遊女と、官廷に咲く、練
習に効んでいる。歌、すま、何度
も喉を破る、くう、また、
順徳天皇は白著「紫紋抄」
の中で、天子が身につけてよ、芸
能のむとつて、好色の道と
選んでいる。花園上皇は日記
の中で、「猿曳き、雑芸はまるご
んと田舎ならず」と、歓迎、そ
天皇も、また、道ゆきの者に
囲まれていたのだ。

スニーカーはミニろなしか、うす
よこれてた。グレーに映たか
その初めは白ではなかつたか
推測される。そと股で歩
その男は長身であり、細身
であつた。また目の周辺が
はつきりしなり。瞳が肉いら
れているようにも思へた。
脇の女は両手に大きなビニル
袋と提げていて、その中に
何かが目いっぱい入れてある。
女は白髪であつたが、そ
の歩き方は若くもあつた。

次
参考文獻「甲世の芸能」(綱
野、美、多) 他

彼女の手にする、袋まもす汚れていた。

三メートルほどの距離に近づいたときに、ナオは無意識のうちに笑顔を作り、

「こんにちやめーっ」

と語尾をい、ナオは延ばして声どかけた。両手を背に回し、荷車をゆっく

り曳きながらである。女は

ナオのアイサツに心える、と言

ありも、ほぼ同時に、笑顔で、

「こんにちやめーっ」と発声

した。男のほうはニコニコ

しているようにも思えた

が、無言であった。

十二月の末近くのあつ日

ナオは名古屋の中心街の栄(エカエ)の夜道を

歩いてた。荷車の一番

上には殺ボールが三枚、折りたんで積まれていた。

「どこかいいコーナーはないだろっか」

と、目でその夜の宿営地を探して見た。灯の消えたビルの谷間を荷車を曳きながら行く。

ひとりの男が大きな殺ボール

と、シマッタの降リたビル

の入口に運ば込んでいた。

寝がらの用意にかかっていた

彼は群れから遠く離れて、

単独で暮しているように

地べたに膝を立て、こちらに

背を向けて設営に余念

がない。ナオは荷車を止

めることなく、男の背後

から、

「こんばんは」

と声をかけた。男は驚

いた表情を作って振り向

いた。アカ焼けた顔に

は、おびえも混っていた。

ナオは、盛驚かしてまた

かな」と少しくいた。

男は次の一軒の何分の一

かの間を置いて

「こんばんは」

と返した。その時には

すでに、おびえた表情は

消えていたが、なごむまでに

は時間が短か過ぎたのだ。

西新での道行きでは

その「一秒の何分の一」が

なかった。長身の男と白

敷の女の二人連れと行き

かたあと、ナオはうれし

さがこめあげてきた。手

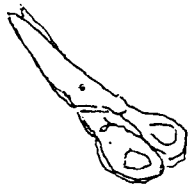
ごたえがあった。

行きかう人の群れの中で

ただ一組の選ばれた者

たちのアイサツであった。

△ △ △



まあ、まあ、イロイロの友人

知人に世話になりはなし。

ナオがタビするのは、そうし

た人たちと共にあるから、

いつも、多くの友人たちと

にギヤかに会話している。

それは荷車を曳いてい

る最中でも同じこと。

この生も一緒にタビをしま

(しよう)。 △ △ △

話

南伊豆町の子捕

り海岸線に沿って

落屑(おちくず)がある。丸

ける旧道がある。丸

山(やま)道と書かれた

小さなトンネルにせいかか

た。ゆるい下り坂にはなってい

た。車を曳く手向もいらな

い。目をこらすと、直線が五

メートル先が波濤(なみ)が身に入

くる。丸く小さな明りでは

あったが、私には「光明」に

思えた。疲れた体が今夜

っていたのだ。鼻歌が口をつ

て出る。それがトンネルの中をエ

コーする。まばらしい響きだ。これ

の声にうしろしたついでに、車と止

めて尺八を手にした。まさに逸

品である。

私は戻りついで再び荷車を曳

く。「ガタン」と言う不穏な

音がしたかと思つくと、先足元

に小さな車輪が平行してつ

いてくる。後輪がはずれたの

だった。明りこころまど何

か引き出して修理しようと思

つたか、思ふようにいかない。

暗がりの中をチエリで、な

んとかなおすことができた。

エコーに酔いしれすぎたか、と

内省したりして先を行く。

一モロほどで落屑(おちくず)の床(とこ)に

ついた。が、テントと張れそう

な夜はどきにもなく、おまけに

道は行き止まりであった。

今度は上りの坂を引まかせ

したのだ。とんだエコー

だった。